玉小櫛補遺

源注拾遺

玉小横補遺上巻　　初壺巻

鈴木朖著

九曜文庫

まろまろ　四オ　表紙題云、ものとあしを後わろ〳〵

あやとこそはつくるもの　ハウ　こゝゝ脱あるべしとか大人のさまるよきこゝろを

小様こゝろもちさしこう　始成等こゝのもの　初はつくそいのつくらう作るも仮あり

やはしはいかおちの路ね　サオ　おの一のこゝこのあはは笑し延つまに鷹せう

ぶうこゝろぶこゝろ　サ四ウ　こゝろ沼ゝふうふ人こゝ四うこゝろこゝて糸こゝやそまこ

えそこゝあ路こゝて　サ五ウ　おのこゝこけこゝかけこゝおこゝナレこゝこ鶴こ

かしづきこゝ四の居　サウ　ゝゝ白きこゝこゝ

おゝう　サ二ウ　新しゝこゝのこゝこゝて　初の不ハ矢二のこゝこゝこゝ

帚木巻

りいけ〳〵れのふとう　二オ　ゝこゝこゝと師のゝ好色のこゝが解こゝて〳〵こゝいこゝ好色のあのこ

ぶるこ一このほうこはれまつるかの世の風流し好色のこのこうこいあるまるやう
のあいだいろ〳〵なるこのこぶこしてこハ百れいこどこうこ山田やしこくし
ゐうひうこうこうきゐうこうくてうこ　四オ　色ハまこうこあるこうをおこうめいつまるこ
こし源氏の見れるをうくいふハ印作品の昇下てこの物語の作りさまれつくる
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
こハこのこれうこうこどこハんこあるてこぶこと言ひこうこうのまてあのあれこをはく
感でこうにせんこうるるるるふ様のあれ大切のれあるこれるゥやし
やるて人をこうまし　ハウ　江戸人石川雅望が源氏を漢に言こう注いつくあ
りこし当この人をやうてこのあるるこうるぶやまるこるあるこてこうこれど愛
の色こやうてハこうこてこるくるんたまいい込こまうるんし又柳の色　十九　み後
壺氏文の赤宮のれるをバの作ふるあるみどをこれ作ふの注しかこてあり

かるらきこうれるく　十オ　光ようこてかこすうこうこうふほでたこ一注のお
のさまあう傳注こ三条西実香をあてこうハるこうこう赤の女の乳とつまこう
ふつのるすらうこておれせ　十五オ　この作ふこうをないこうあるや古き物語うある
やうれ光こうあやしくこ光やうあるるをすべてのやだ色でるこれくうこ人の小説こ書
あるこうこるるこのこをとりてつくるるてこさにだるつこ中こうこ又あくるれる注ハ
誠こ上るれこぶるうこのくここハハにまこうこをこあこうるやこうこさこでこもこるこりか
うるんはこうれバかのづくこてこうのあるこうや
ふるの作（作こうこ）れるる　十六ウ　作るハこうるるるるるんん（作こくこ高）二注ハ
いこやこしこく新しい作こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ　十七ウ　作一ハうるきれこうどこるこるこしこうこでハ次
のみこうこ又後のたこ山こくこ方こいこるこうこうこつこれ桃ちいいこるこうこうこうこ　飯成第四説
こうこうをこうこ　十八ウ　上のんこをこあうるるこ真こ

筆ぬきとを般若頭よ　廿四オ　乗のすゑ般若頭ハかるべみるあるべきとゐて

やのふさゆゑ今せて今めくーくゐくゐくゐ

さてゐの程ハ　廿三ウ　山ゐゐて中ゐのゐゐてきべーものとゐいさゐ作のゐくゐ

面白ゐうゐさゐゐこのの左傳の有宛鄭后羿、晉侯只后羿如何ゐあゐゐゐ只ゐ

ゐすしゐん　廿八ウ　年山ゐ四ゐて宇治殿を二の右近ゐ四殿ゐ作ゐ物いゐし

ゐすくゐいやつゐゐいくゐゐゐゐすゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

を論ずべーゐゐゐ

ゐるゐゐゐゐゐゐん　月　般若ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

[illegible]　四十一オ　[illegible]

きゝもしてせ経の初[illegible]

[illegible]　四十二オ　こゝゝ[illegible]

いつは源氏の[illegible]人とゝもしよう[illegible]

[illegible]　四十七オ　[illegible]

きゝえし

空蟬巻

[illegible]　二ウ　[illegible]

[illegible]

そこハぢまことあ[illegible]　五オ　[illegible]

[illegible]　六ウ　[illegible]

久夜巻

かの夕顔の[illegible]　十五ウ

[illegible]

[illegible]　十八オ　夕顔の[illegible]　湖月信孔説

[illegible]　十四ウ　[illegible]

[illegible]

名残多く[illegible]　十四ウ　湖月信孔説[illegible]

[illegible]

[illegible]

うちれつゝとふるまうことゝつゝ

去中のゝゝるゝし　三十二　かくるゝゝとゝつゝを暑ゝくゝゝ

お月い夜の月を　三十四　山上ゝゝとゝゝゝゝ初ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしこくゝゝゝ　三十五　初墓ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八九月ばかりまでは秋をすてしこいふまでもなれば秋をすみかとしいうるさして八月のすえ九月はじめの頃をいふ（細注）

人人さま　物のかり　源氏君さまさんに限るの世をうらぶれ人のうしろ人八のほめぐらしろうかはらしたる

蓬生巻

物ものしさし　六オ　蓬生のもろ

侍所侍ども　四　相壺者ども上げかうもうの初の頃にて侍所まで

ようにくらのまうてうまとりうるぶ　年九月山法師侍しの者ども侍所

山寺のうちまで来原氏　山初いでの三れまうのうれ侍と

ものしを誤りうのうちはかーうれ　侍所にくらのうれ侍

行ひ山ちこうり侍ると八十　ぶハ月を誤り

いとかしこう思ひうれ　十二オ　思ひ見の侍ろ

かうるうるうる侍　十五オ　侍ろ物ろ侍ろ物ろ侍ろ侍物と誤

侍のうちみを侍ろて　四　ろうみこうる用の光八必ろうを誤り侍ろや

山ぶ物侍の侍れ文のうこまで　十九オ　すでてまうよぶあるまは侍ろ世の侍蓋

の文者ろうあのれううさうこれ物の初ろうて侍ろ

あうぶ佛ものし侍堂ろ侍ろ侍ろ　四　侍ろ山ろれのれこは刻を

いうるあぶ侍ろる初業のうあるまはたろうさて八次の初を侍ろ

思ひのうれど　十三オ　思ひ見つれどうるぶ

思ひうる　十四オ　小侍の後のうしさて上のうるうるうるうるうるうるすでて侍

侍のいの初ろうの侍あやうれうう

いぞうれぞうに見へうひつれ　十五オ　本の侍てうう侍ろ侍ろ人この本

をとうこせんるいいで

さびうりいとけるるしをひを（廿二）　ゆちみとすぎ春ろ（べ）

ろそくみ月のまつ夜日　くハしくハみ月（ハつこだ下のろろ人かろ）

ろそみあつよまれるる（廿八）　みあ山東のまれるとあの今山世の稀るとと二う

ハるうけこうるるう

いつそるくはろそぐる（廿三）　ふハ至のの誤るう

ねらやすあるふれう（廿五）　ゆ第ハ心祓毋ぐらそ敬ろそ伝の母君ふれ

ろ物へるるを思いでのあべきるるう　母君とうるゆ春ろるるべ山かう

浄見石のかれのるハ浦三見乎の物そを石ハ伊人ハ伊人るく

そとあれバ思ひもるあべたるるもあるじ

ふるるちハさるるれそ（四十九）　下へ（の詞のつ花ざ夜誠ま保氏君のろろら

をりるやうにまくうれどれハ必ふの上のろろをとうるまれ

らそのろに義ろ初るるもるべし

末摘花巻

けしきぶゑ（二オ）　俗ま九指かるるとうまれ初ろう

物の花ろ物やうにう源氏君まるまあかの紅をろ物やうる（朔月笑とて設ろ色）

俗のつぶて出しるる人そ（十）　これハ中物の君のろしけそうべ（侍ほろる）

かふしるる仏平の物つ（十二オ）　夕京の上ろふ初とるるてゆろうるれやうるれ物の

立ゼしる夜ーる初ろう下れうれきあるこの京国ど　我来こ世筋非ここ（ハまのるるるるるの外しは）

とどの物つべ人ろ（十四オ）　一本人とろるるべ

いろるまげるるしるれう　ひどをバる次の夜ろ也ますさうれバのバ

をどる改もべぜうう物ます化ど物のれいさる思べ東のまるそ人ぞ思ろ

おしこめらハうハ　嗜唖をバそれすでよおーとしていひけるう

いこひつきまくるうるせ　サ五オ　それハ晴ゝ腫よりもだ打ぶらとしつるもたるべし

ゑのをもようで　サ六オ　ひとるハうぐ目鼻のくるう

まけてやうるうる　サ七オ　まけて八負てこけりと泣るハうるし

けさうぐろすぐるうくやそれぬの　日　けさうぐろすぐるあるあ姫ぐんや

れきろくおちやまれと

くりや　サ二オ　是ハやの名るえーすハやハそりや、すぬしそつるんとこハうるかく

さてこうそのを仕るうるやとしの祖のでし

るぐ山をとうるこハ　日　金四が狐ろこハうう伝江田の山説うるし

きりとしきえーと　サ三オ　ハトるぐとうるぐんとうあるぐー　敵討事と此説ハ山とうう

けくいらそよめき　日　そよめをこうそハうるうるんとゆゆ

紅葉賀美

源氏の中将大ことの中将　二オ　かく改さてかくなりやけのくしう移さる意こ

うそゆーとの行ろ　三オ　孟又細之狩のとれつーとの行ろ行ろあるいぐさ

るこうハうえぐ　如成事之意ナオ　式ハうるこきすなハ式ハうるこきすなハ式ハうるこきすなハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そなへつけて拾すんとるくてとこゝろ
やすきうるはどそうしげろう　三オ
はるゝとすうるおるえいつとゝいつゝそうけそうけうろ、上のうろく
てとそうろくてとそうけくうるろう
保氏のおんゝ　ゝてきうづし上の句ゝ　ゆうて有ゝふとゝ省きうろう
やをゝいくきおうて五う　ゆうやをゝうのりとゆゝあゝとかつとうづし　侍はゆうろん
ふゝどゝきやうくゝ　十オ　きやうくゝ八数ゝ系ろうづし　はみゝ秀逸の作句ありとゝ
上の若菜の句十のむゝたむゝたにこかけまどいとゝやゝざくゝとゝあるうどゝ八物しる
ゆうろくゝう
おきるゝもりとゝ　出ぬべき　日　續日本後紀、承和二年正月丁巳天皇召尾張濱
主於清涼殿前令舞長壽樂、奉畢、濱主即奏和歌曰、於岐那度天、和飛夜波遠

良無、久左毋支毛、散可由留登岐余、伊天立蔦毗天年、天皇賞歎、左右垂泣、賜御衣一
襲、令罷退、この句のゆゝてうるうう保氏のゆゝて業ゆくまうゝとゝさせうゝ
うゝりゝはゝとゝのゆうるゝうゝのゆゝるゝと嘉是いつゝ
おゝやけてゝそゝうるゝのゆゝるゝとゝ　ゆう　ゆうゝ考ゝかゝゝれゝあゝるゝ
世のゝうゝひゝうゝは作ゝ世やゝのゝゝゝとゝくゝ考ゝゝるゝ知武政ゝまつゝん人ゝいゝん
つゝづきゝゝうゝ
やゝゝとゝうゝうゝどゝて　十二オ　み振ゝゝゝゝあゝゝどいゝゝあゝん天ゝ子ゝ臣ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝの作
みゝるゝゝやゝゝとゝみゝゝつゝうゝし
うゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ

おろしまそなり

あくまでうつくしさ　あくまでうつくして別を惜むろ侍は飽るらしいくとうつ

いうるあり

ゆひやもたくろ〜ん　ぶハ〜ぶう

ゆうなの色そうろひて　紅葉うあ〜作うあろう

そこらゆ〜ひきあ人の　小橋ゆ〜いとあて腹あるつ〜ゆ〜ゆ〜あるや

宮の御たうぐう　宮の氏高まて臨時の御加恩ろうう〜ぐ〜ハたまうろ

白虹日をつらぬけるを太子おぢろう　作者ハ太子のきをすし人るこ〜ろとうゆ

花散里

とぐろ巻の〜つるも　とぐろの形ハ作者ハ何を異本ちる意人る

ハ吳ことハをは孫ま人〜ぐのすぐれるを〜ろ思ふ歌の三軒のつま

とハたぐ橘のこさ〜むりいうう〜ろ橘を引ゆ〜ろ意あ〜ぐ

おいさぬるゆハあ〜ぐろへ　茅ゆの白し沼ゆうをいて傍にひうろ

須磨巻

とゆひ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　諸の字衍字ろ〜さ〜だ八下かゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

いとおりろれ日り　ろ〜ろて白きろ〜ろ〜ろ〜ゆ〜ゆ

とりろて哀のこつれぜ〜れう　下へつ〜げ〜ゆ〜

ゆとうゆ　ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

諸の詞ろう三中ゆ六ゆこいとゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

かのてろろぞうし　げゆぞあれるゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

氏君のゆ沼のやうゆ書ろ〜ろ〜ろ〜ゆ　手紙ゆ云此後ろ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

たぐかくゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ　たぐハ保のゆ沼ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

しべ一ふしとのこゝ侍とあるを又こゝ

あまをみてあくがるゝあでうこと十八う　夢に源の中納言を感ずるとあるハ

がつて上まとの侍ふさまをうしてわるこゝるをやゆのいれつる

くすべて此物語にある歌とゝもほのそるゝ一ふし作者の用意ろ

つゝふる紅葉のし　サ九オ　つゝハおせの孔まて侍に因果ろ代々とゝ見こ

源氏君の御ろく侍ゆまつ紅とハたゞいて源氏の御ていつゝそれぬつし

ふる紅葉との侍ふゝろ中お後の御をゝそろゝ

ゝろじてゝし　サ二オ　ゝろじてゝるゝねと八琴をゝ一ふ方れ凡ゝハ侍凡

とゝ一ゝう上ゝゝれ見ゝゝまふとあゝ行ゝの松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゝゝう　サ九ウ　ゆゝゝうの御ゝゝゝ

いとゝゝゝ秋　サ七ウ　侍ゝゝ一任の間五ゝ年とあゝハいゝゝ路の秋をいゝゝゝれ

これまでゝ思ひて日　これれいゝゝゝゝゝゝゝゝ日しまで八ゝう侍に侍

まゝてゝゝゝまゝゝ八ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おゝやけのゝゝゝゝゝゝ　サ九ウ　かゝう八却ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ついをゝゝる日　ゝゝいの文八日侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝいゝゝゝゝゝゝ　四十オ　我男ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ

るしうつくるぶねといそぎハ海人ま係るーいけるひのことを係ゆとすべし
いつまゝ新面き（四十七ウ）　係の羽とゝ係に乙し宰丸のり白ろう
さゝとゝかゝそや（八）　ひゝろありてまづきとゝとゝを（て）ゐるべし
うゝの面をうゝくゝるぶゝゝゝりてとゝるつゝ（四十八オ）　かゝ欲ゝ心隨湖水共
為くとつゝまゝこゝろゝゝ

明石浦

波風ゝさゝぶゝゝゝ（二十）　一ゝゝゝ

すゝしう見ひめくるゝ　十三
おくゝ文うんぶこうくゝつを
こゝろゝくゝきさ面ゝるゝ。日　むかしじちのつれいでゝて結ハしにの後、
ゝゝ人の
よこうゝすゝに年月廿六　ほゝゝんあきゝ見ハお拾ゝ辞ゝれつゝゝがゝしゝさゝど
れてゝゝハ去ゝ男めの中をゝひていきぐゝ人ゝあいぬ祖のゝゝをゝつゝゝでいゝる
ゝゝびたゝゝゝゝひのゝれゝゝゝハあゝゝゝび初のゝゝは畢竟同じ
ぎ角ゝゝゝし　廿一オ　四石上のゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　四十四ウ　ゝゝゝゝハ立ゝゝてゝゝゝゝ同じ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝれを
ゝゝゝびきゝゝゝゝ　二ウ　ゝハ色の後
ゝの後ゝゝ　十二ウ　ゝれ祖とハ業のゝゝれ心の後ゝゝ心ゝ見えハゝゝゝど

も者ゝゝゝゝの後ひつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ優
ゝゝの初ゝゝ初の後ゝゝ　ゝ保れゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゑ[illegible]賃[illegible]誤かり

至さ天

竹のこれよりきうを 二オ 山田のるくもあぬのたまあべーうつ一誤る

ゑべーゐをおほ後ゑすもゑあるるるるぐ[illegible]れ八お後ゑきるゑるくわ[illegible]

山宮をハふゑゑれ物ゑふゑゑぐて 六オ

一ゑ又すぎてゑあるゑゑ

作良ゑをいひしゑめのとゑのゑ 七ウ 一ゑゑのゑなーのゑをバるゑゑれ

ゑつたゑゑ人ぐゑ 七ウ 山ゑゑつぐ[illegible]ゑゑれバるゑゑ田れ春ゑるゑ

ゑもゑくゑゑゑゑゑゑゑゑゑ 後ゑーゑゑゑゑゑゑゑゑ

ゑきゑれゑゑゑめゑり きれゑゑ白切ゑるゑゑゑし下へつぐけゑゑぐーいぐれ

ゑゑゑこゑゑんゑゑゑついゑゑゑし[illegible]ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

年ごろあるめさまゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

おうしと伴なりて十一オ　いたに股あるこうみ八ミうもたとあしをうゝ誤れる歟

からのきをでいして十二オ　陪してうゝふうあるきをうるべし

えうせつうきゐあるれば十八オ　ゞ必どの誤るべし

食さいえひ十九オ　食と初ふとをかくと三つるゝぶをいと

本ざいのうゝのあ　本ざ八上ゝいるゝ者又をかくる日しそのをざ

いるゝゐ者れ雅楽ゝうつるゝ

世の人ゝうゝひきえをせ廿一オ　妻の人ゝとあゝぶきとろう

おほえおさゝぶき廿二オ　学文麿ゝうゝ

さゝうきゝ学者ゝ　廿四オ　先八浮気君一人のゐんをいまあゝ者ゝ代のすゝての

越ゝうゝ天ゝ八初くまゝくて初の上八主ゝうけていつゝかくゝぶれ八上のつゝ

れ又下のおゝじぞれとゝう初めあるゝゝび信ゝとろし

松風者

ゝうゝドつゝるゝ伴ゝをゝゐんど　四オ　ゐゝあゝぶし

ゝうをゝゝゐ人のゝうい五オ　いトのれふとの三字一ゝをゝ知をゝゝとん

おゝろひゐまゝう七オ　まゝうふと教てゝゝおふぶうすゐ。ふれ

いきて又いう　行てゝ活てを存ゝう

とゝうゐがしゝばゝる十二オ　ゝばゝ八はゝゝうを誤れゝう

薄雲者

つゝれ五ゐゝく二オ　ゝに白きるれゝし

あゝきゝるし四オ　四石上をゝれゝる白ゝ貸ゝうゝをいとゝうゐし

ちゝれゝると七オ　一ホあゝきゝるゝゝあゝるゝし

ちゝれゝゝハゝゝるゝく十一オ　ものゝすゝゝうゝむゝゝる泊ゝ伊ゝ明石上をゝりも

あんさわこん　さう　そちらこ人ハ中しるんいきとくうるもの（とうそそ亦ハ
あすとそそてねそこん（そいとそさこうたハ水てくくみまてうろおこり
天皇人をうたに　サ四オ　一本天べんるどをうることあるようし
放院のぶこみもうこるめこく　四う　放院の白をうるてそそうこあうきてろ
かくるこの例をあうくやときこん　サセオ　小松ようこせる一本ようこいきこんとある
ようとそ見えて上のぶとかさたりうり
あまるれ保あうう　四う　一本のもうるたどよろし
こちらけうこんと　サハオ　けトにぶんの二字をうるべー
そのこうの　サニう　こうこいことを保けるうるべーてハるり
ぶしうそてこたまうこ　サニオ　又うまうとあるべきねうこみこそ句
きうろし

紅葉

人のほうぬそこう　四オ　かくる名をうるハとしてるりとしるりときくハ信の
無るるうるく人のハむまさこうるうり胡月師説をおとるるべ
いまこ見るさたに　四う　一本いまたをいうこせう小松の考のやー
あるうるぶ　六オ　殺そきこんるってけよもべー
さうそいこうるうるどこし　四　花の白後太うこ仕て源氏君八年の秋
よういこう移びこの上ど西位の花うるあハせて八若くまんるこう昔
ようハるまあーたけのそいてくく殺みこ
ふうるくこし　九オ　かくるるうるうるうるくくこうるるるうるうるべるるるべ
こんのうはうるぬをうるう
ようくるいーたうう　四う　ウハるの説うう
あるうるがうしうこそこ　十二う　一とうしこうこうるうるうるうるうるうるべー

そそとせのあるくこと　日ウ　先生の校舎古院のこころをばんこと
をとろくきことあるなどして方丈前御のあとをたるすハそれうされバ
十年のあることあるとしが浪行くるべし
るることあるん　十六ウ　注そばとつかくんとの心とつてはうつるまた
そそそそそそんのいつ怒と何るうるあんさくるしとく
人づくのいいく　十七オ　上のきこえのあるの一句うつげるべし
あうぐくらぐれ　十三オ　ふうぐくハすでて侍とおそとぐくふこたう
ふくせんつそうて　日　人をまぢて上ようつげるい説すし
りうもいてきし　日ウ　欲のきをうけてよくをつげくう
そそそんそ
いと高し　三オ　此初草の地にて下の日あきえをつげるを君とふ

廿五字の内初の一字の八くおよるびへつげる
おかるくうくけうを結ぶいう　初
ふんし学校の中にハ芸術をくくんげ　歳と徳とそび師を敬ふい
ふ儀式を行つるるるくされバかく侍ふきくんのゆんげるくそのてと
そうけうをうを結つるを拝その祝礼をとぶしるうおうすハ貶の字のを
て侍ふきるこうあるてしすべてこのおふるを注ぎ方を解るやまく
れくるの拝と四ふうをびとくくくう
るるうぐしざうに　日　るるうぐハ古侍のそこの侍ふハ者ハいくあるるを大
学の衆ハ書籍て耳ふれて此日をつるつがをうに拝ふう　ひざうハ今侍侍
何某をそうべ　日　るるてハぶうう此名をいつるう　外こうるこるこるこ
度を引て主さうびるん　日　たうびハ侍りうう侍せう主侍るるんといるるを
りつるう

そせのかさしへきみてと引て十二オ くみのよしてて結ぶるぐ

きみてそつ注ぐる

かーのこいのまとる四う こてそ白きるわしてつげもぐし

世のひるものてそし日 ひかあ天十2 ゆかやワてそそるる西の仰大

そいとあるとは仏るるる

さるるそそるるるとちらせものて廿三四 こみるとと宮の家とそ七きいてるう、注ハ ひかるるる

爰ようれるる不廿五う 一ホぶすぐるし先そいいくあんみるるるきう

ろーいそて廿七オ ろいそてとは仏るるみるる屋しとけてそるるない

おそいもさるぐきさるきこえて四十九う 一ホるかくるるよろし俗之可彩伊

板板る你止てとふそるる

いくそ爰しせいう 五十オ 傍注ひかるる そハ后のかんの白そ保のいくそ古の

るとそそしせいうとみほてそるる

こそるとやそていひる五う でのかまぞ。ぐるぐーるぐと。形仏る

故之爰しるぐし

きてついぬ 七オ きて鍵つるる

狩うぐいハかいう十う 已ハふを誤仏るる

るるこれるるひるんとるんこるみ 廿六オ 之るるるる

初音

けさはじめてうぐひすのこえ　三ウ　ゆきのうちにうぐひすの白きはつこえ

ふるとしの　四ウ　ふるとしのうちにはるたちけるとよみけるうた　延暦八年月をうけ　四古八初春歌

あらたまのとしのはじめにたちぬれば　五　常陸国の風土記にうたへるうた

さねかづらくる　六オ　さねかづらくるたびごとにとしをかさねていつまでかくるとしをかさねん　四　下ゆだいごのあぐりの君のはつこいしきまひるあり

ふきとかぜのこと　六ウ　ふきとかぜの一つにて雨ふるとて邪あるべきことをいへり

下の句は古歌にしたがひてよめるなり自のようにそいつるなり

すくなくなるうぐひすのこゑ　七オ　すくなくなるうぐひすのこゑをきくとて下の句

なくなる家のかきねにうぐひすを中ねはさもあらんといとかくと

おかしとなるさくらをみて　八ウ　おかしとなるさくらをうつしてこぐらにてみるさくらをうつして

新しいくさとなるハやとなるとし、但説のきくまでいとなくさくやうこせーといふ初ハるハ二ハ仍るるうるうるとはいそいと

蝴蝶花

日うの里ハ　二オ　花菖の色を、このあまるハまぐさのめやとあの里

ふいめるしうえまこゆとるう下ハ　あ花ハ菖とるる稀し今さるうえ　とあ花ハ菖とるるべー

ろうねくしのろうる　四　そうるとはること写し様ものはつてろうねくしのはつてこうはけん

えんうれつるどのう　四　公上うれてぶきいどうてきうえうし　はしうれうる脱る

てもあるうとなるつしる嘉基云ハ上のみ（ぞその関ろ也ろ也でのどハばるる

べーその品のさるるうるねるしてこるうさまた為ると

いふこうとこめこる文法ろ竹反無ハ　はこ是ハさんるるるくんきく

えうるうえ七ろしてこ　同　十五の　老おとろく侍へるこまとろんをるこうんこえこ

こうらめとりしてそこうをもつし蒲みるハあんに兵用しみ法多ゑしといつを
ふなうらるゑ世房ゑんどハ三オ むゑと中文の世房をいふるゑし
やゑてまゑで終ハで七オ 傍注ゑ兵部仏とあるハこゑるし下の人とかゑうく
でけて仏ほゑし兵部仏のうゑかきるゑゑしゑんとれゑて自きるもわ
花ゑふ生ゑて八ウ おゑとハおろけのつまるゑゑ傍ゑうぬゑてといふゑと
こなるゑゑゑゑ世ゑうけのつまゑふゑ人のゑゑを終ゑてといつゑゑ
なし誤あゑし沒ゑゑゑゑ世ゑうけのゑとあゑまゑしゑるこの
仏むけゑと十オ けゑゑ自ゑるわゑし世ゑくつけゑもゑし
ゑれハゑどめいゑる而ゑひゑる日ウ而のわゑゑゑひとつゑゑゑ
ゑれれゑうと十二ウ たゑれとめゑし たゑれる自ゑ仏ゑれる八誤ゑ
ハうゑうゑさゑゑゑと十五オ ゑゑゑゑゑゑゑゑゑし十一ゑゑゑゑゑゑゑ人ゑ自と傍

注せるゑゑ(おぼいゑふのふハふゑゑて自ゑゑ終ゑて上のゑんれ終ひゑハあゑ
桶のゑい十オ 注ゑくゑゑゑるゑたゑをゑ終ゑ初ゑ自ゑゑゑゑるハいゑで
つふゑゑとゑえ終へゑ同ウ ゑゑゑてきゑゑしゑゑゑゑはたゑたゑをつけてゑもゑし
いゑゑせんゑおぼゑゑて十一オ おゑゑしてゑゑうゑゑゑえハゑあゑまゑゑゑ

夢見

ふふハめゑゑゑふゑゑくゑ自ゑゑゑかゑゑゑ(ゑゑゑ 湖月ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ自ゑゑゑゑゑ
せゑゑゑしの反上人ゑゑ十一 せゑゑゑゑゑかゑゑゑゑゑまゑゑゑふゑゑゑくゑゑゑゑしゑハゑゑゑ
ゑを生ゑゑゑゑゑゑを假名ゑかゑゑゑゑしゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

いけるをまて（日）一ちゃうつるをとらんとしてをしたてる白
きるわろ人のまそきぐし
あるこざそてかづきぞと（同）藝道のまく小孫二のまそ、れをも設あやま
人のうへまそいもどり孔ぐさうろ（廿四オ）久雪れ仏中の印
そのおひ出こるおい之人ぐら（日）湖月師説よしおぐ之白きろろし
行へをぐかるこをと（日）ゐ一こるもこ、もぐし、これをゐることをまんまハ上
の人をぐのをぐきゐろ

常夏巻

とうろうおけるゐぶるまゐる（廿七）一本ゐまゐをとあるゐろし
ざえを人ゐなんをぐぬるぐ（十オ）ゐんハ誹るゐ様をまをはとこられくるは
もぬめうたうれ（十四）たつれハたまへをを誤をるぐし
人ゐうきやうさくゐるゐあひゐるなるんうし（十七）少ゐ人ぐをとうひてゐ

ありひぐをとひゐるんうしとゐるゐ心ゐぐをおちあやまるどあるぐし
ゐ人さまゐる（十八オ）ゐハゐを誤をるゐ
のゐうおゐうぐる（十九オ）ゐかぐまそきるハあやまるなう

篝火巻

けるよくゐをと（二オ）み様よいをれるぐし一本ゐハをとなし
うち様（三ウ）ゐみ様をい嘉墓ゐ為くぐ物語ゐをさい様のすれげゐを
とありさい古ハ析松を今ゐゐう様ゐうをれと同ぐさい様ゐぐ
をう様うち様ゐる析を析ゐ析ゐ誤ゐう

野分巻

あぐきゐくゐをする（四オ）ゐをまるまをゐるハゐわ一あるきなくをゐをきぐし
これハ下のうゐをゐをつぐく之ゐををゐをゐるわぐをつぐくなう

おとしいづれとハう　○ハゞを誤まるなり　何ものやとあやしそさそいひ
てうれぐとりふるう
まぐうしもまゝ　九オ　こうしまゝるこゝはこうしをおろんを多くいゝど
こうそハあぐるをいつ
いぐこうもゝをんこい　十八オ　是ハ俗の作者の果て歌のこうゝをこと
うるこうるゝ上のあとにこゝ記のこゝひいこうゝ　しぐこうこと八徒り作者の誤つたこゝつけこゝ注誤レリ

行幸巻

かくいおぐしいこうぬるゝく　二オ　上の巻のすの方をうけこゝ日ゝ
宣ぐいさこうこうつて　三オ　一ないさこうてこうちをこあるこゝ
うこうさいこゝひつるされる　十六オ　さいこゝひの人こゝれなつるゝ人こゝ日ゝさこゝ

源注拾遺　賢木

うき世をゆきこゝれんこゝおいて　○案好逑集に　あこゝむの年ゝ
つる山里こゝゆきこゝれぬる示ゝ　後撰　ゝこゝこゝきこゝ
ゝれまこゝて八こゝ侍こゝをゆこゝ宣こゝれん　拾遺　いつこゝたゝきこゝ
こゝれん世のゝこゝのゝれこゝこゝ人こゝつこゝれ
こゝゆこゝこゝこゝこゝゝつこゝた
ゝ一方ゝこゝ

夕月夜　日本紀　○案日本紀ハ
志めの行ゝ　○案宣家集ゝ　ゝれこゝんいこゝのゝこゝこゝハ
んしめのゝこゝわこゝゝこゝ
こゝとゝこゝ　ゝ　ひ通せ　○案乙せとゝくハ俗ゝあこゝこゝこゝ
乙の俗名ハ於の字こゝて遠こゝあこゝこゝ方せこゝこゝこゝハ小津せこゝ登

と通ると敬うことのとうて

とのゐのもの〻ふくゐをぬ〻〻えて

元袋ハ俗ていう書袋ことのゐのもの〻人物ハ〻ぶくうるはしくもてなすとて

○案ものゐのもの〻東の物

るとうふくうるを世うて伊氏の盛りかとつくれたるゐの人ものるく

しうとゐるうてゐれひし〻書袋ものえたとうて後ハ方きうこうの

ゐものをうこうて大浦のうたりてきうるれ　大浦ふるとゐ

らの物のこゐのうなるうこうゐる衣ら　返一　能正　ふりぬと

てゐひとすて〻うる衣うこてあやゐ服りてする

所のゆ〻いうるやくて

○案大和物語上平中にくうるをふかう

紀女をものをゐのてきそ〻ふきうるうにうけゐるかうるゐとひてめ

ほゐるれ〻ゐ〻このめにをうるやうゐうんらうたーをゐひゐるう

えうるめていちやくいい〻れをちうくうるえうるそうく

かうすちてたゐうゐのれを

○案系図ようて沖ようてくうるハ節

えうるうゐるゐうこゐの字ゐうてうるハ誤

五、えんのうゐほうのうこゐのて

○今案こうてほ〻ハ伊勢法之すの

字ゐうえうるを二月の伊勢法を俗ていひるうるをそうて

欲きつてわるゐハうるて迎せるや胸のあく色きゐそうるく　万葉　寄

日地の伊勢ていうおんれゐて物ゐうもたりわうるうくハ　古今　うるこ

とく物ややつき部ゐ物ゐうもるくうるくゐるん

ふふるゐあうるゐ月夜の

○案　万葉十　とうれうるあう

きゐくゐ上海をのてこふうん君をうきものを

あゐてのうゐを

○案系統ゐ敵をうくうゐ返一の下ゐうれを

けうの今をこまひて今まで迄事れかくらてかくさうとのやう
にあれこうあをとふにはうつ行はて云うつらるのやまする為うみ
のうけをてうひうこれをへ（業世う物迎せんとうう侍ほうにし
これと神とつけうふこれるうとたうみうけきうんてとうつうと
まうは物）

かりをんをあうをうるん

はんうれうこうのあうはうこうるうう

あうしまあうをかうやく世

れやるーうもあうを世をるうたうう

をを林況をまうて行つう

常東秋をの行の西形をいうくるつうをちうて之去をるの未ちと

○を菜六帖　ふうををいうとをう　脱アリ

○今菜　天川うきうをの色う我る

行つう五三代実深をををうう

芳をを今をうかいをまる

むうをを今をうをらうをる

細いう一（のをいのをまたうを迎

脱アリ

ううをん物のやうに

○今菜上の二六帖　行ををををををの　念

呼　○う迎を物をうるやせやををーる

ううのをかうをん

菜　義東帖規　家式アを　沖すいを名をーしかう迎を物もう

をやををををーし　六帖　ゆをを物をもうやををるのあを

をやーを物ををうを　脱アリ

義家アをに　あをつうをを迎ををををるををほををやう秋の為

をの　はをうをを八今をたうひをを上をを迎をををを

山つとりもせこまりの歌

製　足川の山ぢきりは山人のうれをはし山つとそれ

こりうのおりてかう　○今泉ふるをみせとりつる川ゑ山ゑる泊

仲集上　あう佛たうつせよこくらうれおもてかうをあのうそせん

かそうし人のとう苔も伯ゑ　細山さうて足ゑやくゑと（こつ里ハうとそ

人のゑうゑ　○今泉代川方ハ後拾遺　寄ゑ泊後拾遺紀貫之

ぐれ白人のゑを寄うゑうを後拾遺ハ後拾遺　今泉代の代の作ゑて此和

後うう後の方ゑる上川やうしこうひゑをさる古方のをゑうと川ゑうし

人のこうゑつをしいうるゑのせいとゑをれしゑうん　○今泉

代ゑうり寄をしこうの代うゑやうゑかうゑやうゑ足ゑ集の方ゑて心

を旅ゑいゑう

思詩堂

らのつゑし　○今泉和名云唐式云深麻希廿五張穀希五十張

標音方小反袖端也見唐韻　うれを表後しかくを暗推の字

ぢす　細帙簀也　○今泉日本紀云芝草をふんまれとゑり帙

のゑをされて袋を帙をいうれてゑ　むゑきとりくゑ法隆寺の宝物を和

けゑ仲ゑ代帙簀のいふるくまきれるを古代の物と云くうるつゑ

袋作りき

こうをまつくしてをつうしかんをいくせん　○今泉　寄花

ふうをゑるとをつうゑる足ゑを今ゑいをあつうこうをゑれ

方に月のをむ更衣をかゑをこうゑ　○今泉とてふうをと八保氏

後の山お家作うゑやこをこゑをけて不白も保の作ゑう後ゑけて足ゑ八

後ゑ方につけうをゑをゑて後ゑ八ゑゑやまれてかつうゑいけう代

思詩堂

世代とよしたまつ

うちうるふれて　○今集　低徊　神代紀下

いとのひてひきかすゆけど　○八雲立帖　ちかるとあこれ

の点ゆ川ひのたひうれうは人と知らん　行方のうるま

しひきうう花あるまきつてといつ

さそれ　孟　さハあれとまの沼　○今集さハあれの明るとの

字ワとらいー

花ゐ里

人ーしぬ沼ん　○今集古今　青ハ花のあうるとまき

てうけんつうやうりうとうん

ちやうなる字　○今集　細々計　遊仙窟

おぶめうるやと　○今集　後拾遺　秉文の沼　美のこと

おほのれゆく安中よいつくむとうきつれもれ　用　みれめくる

祇もるくてうりくよ美ようくうんうるくの

字をちうつうえをとのうれぬ　もをちうつハ百第ニ百千支とこえ

て　○今集万葉よまきく百よる支とこの初るし五百童山八百日行濱

をいふ時百入るハ保ニ遠ニあるとも五百入とうきて廬岩信字とせう

拾遺集文　うつ林　新当をちうつうれうひとうれ支

のさくれのや　○高野集　載うをちうつの初此うこと

ゆ　りまれう百千遍の美なるは保知加敵里とあうと後の人をちうく

りと改しるれりハ好恨し言後ニ多い誤て初ずうをちうとうめり

うをーうきねまくて　細　むちうーうのこうとをうちのてううう

きねしえこうてうこ

○今泉いけがはりやうをまへ

又 曾丹家に　花表し屋の木れまも志ろあひて天てる月の影うま

れる　るハこれり似うこと

いたしてう　和いうしつのてかうこ（ハ）ゝとこきをいうしるそ

うふうこうのうる　○今泉うれ方仏寺五物後の方り東浦

家集うひとものにまりてこうれたむうものうる志きまをそ面

ゝしあくせてふるこをみる中まそ山方ありいうしてうハふうこ

のすこあるは誤るこ

こりつの世のさこ　○今泉注ゝ五の字をさうれきこをさこ

しるうこあるは誤るこさたこ字をかしつれて今異こ

須慶

いうこけるを面あしほいうるこ　細叩（しゝく）河花書こ　○

今泉家我ア日記ろるうかあまをしおたくひきうくんうかし

こうこんるるとうもこけて面ひきいつくさそ　川茶せて山田

へ叩ハみくるとあるひこくとハ仏のまあるに

たうれてわうう行て

○今泉物こ注ろう異こあの集に

たうそれきつるひるしみ琴も月ゝあくそ当面さうく

ごさまううさ面　○今集（しゝやうしゝ）東西　日本紀

いつをえたかうう三つるさを

○今泉えこうみて作きをいつれハ

えるこそこつんをとあるし作ハうれ死れこ作く

こつるいいて作ろうていこれぬをいつをえこをいつ

ろへ山りし嬉ゝ　○今泉形古琴哀傷こ世のこうれたこをるけく

こころうちのそたて谷あるあしかきうゑ物を見て　ハ俊元の子

又一人の姫ゑうし久方を谷ろむつま死拾首の序　拾遺

うゑつ山こたくあつのかうそとうなくはしうたさつうん

年月をへハいとほのゆもし　○今集いろんいとほのるたとるし

うハの沼とうをえ〉

後をひとめうけて　○今集後の月とうらうをいつ

うゑうハるくあるハ光すき

○今集にはあるハるくなきハそ

そのとり山をハ町をそ玉たくうゑ小町家集あるて新古今哀傷

しみ町をそ行り但家毛物語ふしてあ宮と世の中のちれとそれき

てを梅ほち為れ新ト言ふ人　世のゆとあらもうとをつく

なきうかほくしるうにるを　ふたと世とゆくを文の心義人みたとの君

ゆ　あるハるくなれ行ゆ世ゆとあくれいけまてあんそ

とうとを小町家集と小大君家集と入まをうをうをおいれたこれ

小大君うをの小町集ゑり行るて

世をるくなりぬ人をいとうるくはそきわさうる　○今

集費之家集ゑ　うれをいけるハさそもみあとをあるのし行ゆれ

うされてさくちるハうれと　○今集保長々うされてとくちるあ

ひとかをを沼のうをえれ行

みうをやうと　○今集東俗集ゑ　はをうの父ふを　ハふ

そううてあての山次を　きるうの　えれをあうとふみうハやう

とに山をされもりしせていろめきるくをやえしとあう

かいのをつくとうをう　○今集万葉才十　ハタうをうをハ

天川とわたる舟のうい笠しつくこの　赤人　あう(ふ)坂を生る

てふ(ち)ゝ夜ふる雨のういのしつくう

家おかる　雲井う　○今集おにとかるてとてしつゝ〜れて

さゝらぬ人まて感ある宣ふの文ハそるくもしとハゝゝる

いとしれいて　○今集に同末摘やうの書まあるき　拾

遺集雜三　赤ほ　久ゝこの石のふる日とをてひとゝ山(まと

れくもむれこうう　ゆ花百葉末にまあて　鬱育采(イウヒヤウケツ)とあるともしる

と改てのうれ花ハ役幣の人ゝ(しいくしハゝゝしさ)

ようゝ珍ひしまれこう　○今集に同ふ　わすゝこうきてハゝを

ふ母さ花をもむつまやゆゝとあ(ハ　ゆうこ秋ゆきれとう

とうゝ　ゆうゝ　ゆうゝ

家ふ花ゝうゝとゝやくゝまて

金ゝ花ゝ書の秋花萩のふてゝとやくとゝくゝる　ゆ家ふ秋

ゝうはやくと受ゝるれハあ遠せう　後拾ゝ三四　ほゝこ

やくゝのゝ枕のゝにほれて物ゝゝをぬさこの浦ゝる　續ゝ雜

中　紫式部　ゆゝ物ゝ拾ゝむあまのゝうゝやくとハゝゝる

けさゝやつむ　新拾三二　和ゝ式ア　よ床の海のあま

の苫ゝさゝゝ秋とゆゝやくゝゝほゝゝる　ま木サ家

源氏　袖の海ゝて　ゝうゝやくと拾ゝれてあるゝゝるあ

まとゝう　ゝれゝ焼と役ゝゝ中ゝ拾と紀伊

とは山秋ゝう海ゝゝあもゝる新後ゝ拾ゝゝあゝて

家ゝうゝんゝゝあまゝにつむ　○今集物々あまゝつむと

仏ほとけはあまたこの世間人と世界ぬ故ことひろいと大うなりて
これまでおこつけさたこととてあ人さとうれとうれ
さらいの間をそまてと上たてすり仏大をくあまとゆあ
しのやうそあるきりのと　○今集徐日本紀深沈同
ほうふうきものこてう　○今集脱

伊勢物やしほひのうた
志ほのうるあうすうなもおのうそうひあうとうそつうれ

○今集後志三　長谷雄

形太龍下　和名式ア　とゝのまうよれうくゐれて
今ハわうものうひうすう　兼盛集　そ間の間うあうう
すうあうれ大ううひうある世とうそつうう　中務集　あ
きうしてうひあうるとうふをうとうふやうう
方　せ人乃間の上こく　細　せ人ハあやしきあうそなうて
水面のうて間の上こく　ひうはて詠行うや　○今集ひいうはう
せき吹こゆるとひうんうあこすう　うくいうくハ
うくゐハあうに変ゐる侍けういうれもわきうあうもうあ
ほのうたうらひきうるのうへうとうやうらうと　○今集時哈日
紀貫　脱

思誠堂

月のつねてゝ年からの月にまうつること　○今集本朝文粹第十一

重陽後朝同賦秋雁櫓聲来應　製詩序菅家云秋雁者月令之賓也

櫓聲者風窓之聽也、觸物以感非來鏡湖之波馳心以思只望銀漢之岸

又後江相公同賦寒雁識秋天應　製詩序云、急響似擬暗破孀閨之睡、

寒聲亂櫓忽伴漁舟之遊、

仰月ハうしき人のつるんやゝこゑの空とゝ月に問をそくうゝ六

と月ゝに後乱のもゝをそくうゝ　○今集つら

作之　あかつきの月のとゝ月をとゝぬいつゝき知ゝあり久ゝ

こゝをゝ月をそのゝし

ふゝやゝのうし　は考鉢　日本紀　○今集日本紀之ゝ

系ゝたあさまきすくせとゝゆゝをゝあたいゝそゝはうゝてゝつ

きなうゝんさゝをゝひうゝ仰ゝ　○今集いゝそゝたのゝたゝて白ゝ切

ゝ月ゝうゝんてゝゝつう

月ゝうゝんてゝゝつう　○今集年のゝゝんさゝうゝやゝゝき考

のゝゝうゝん去ゝしくつゝゝやゝをゝゝ月ゝう

ゝいゝうゝてゝゆゝを　孟　苦痛之　○今集屋ゝ宿ゝて

いゝかゝうゝざゝくゝゝゝ月ゝをゝうゝて　○今集　脱

いゝうゝこゝいゝうゝゝゝゝゝう　○今集第重第二　すゝの御之あゝう

すゝうゝゝん大ゝうゝうゝいゝゝゝ世ゝをゝゝゝゝのゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

第十云、兼名苑云、国一云廩（伊奈久良）四聲字苑云廩（久佐久良）（反和名）萬葉藏也い林
とと立也とと山の国の字かるみやうられ山い林とふくわ
るれとくらう何とかなまて廩の字なるべし
ゆくつき数のつくるを　○今泉数のつくるいさとゝ廩をとゝ
数のまへみるくらうまてくるあをいふこと数まるくるをゝ
くるみのうつて　○今泉百笑第二人丸七言　山辺のやそく
まてくるまつるひかつくまれとゝ　山祖彼集中おふし
やちくとゝくとゝ　○今泉百笑　天平にそよ平にそ武
こゝのくるしも思しまきねと
たつくるをやをひとゝ泳をるくにてきるくつて文をゝひつて　○今泉
笑八行あるゝ百笑第十の方を示ゝ　多都我奈伎安

之敬手左之豆等地和多類安奈多頭多頭志地等里佐奴礼婆　山あこ山
方の名白八落ゝ時をとゝ山にくゝ
多にのの行あきる何ゝ二つのあるゝ　文ゝ　てとゝみるし
つ、けやゝられ落をとゝの二白隔てゝ山ゝ第武アゝ山ゝうきな
れとゝの白ゝ落ゝ修ゝをゝくるゝ　ゝをひて元ゝくをゝくゝたつ山ゝ多頭
多頭志をゝ山ゝ鶴ゝ鳴ゝを表ゝ表ゝ世は多頭我奈伎と書つきた都の字を
用ゝれゝたつきなきゝと表にてゝよゝる紀ゝ文ゝるゝふゝくゝつきゝを八百多ゝ
鶴ゝ寸ゝ多頭ゝ寸ゝ多度伎ゝもかきてつゝを用ゝきゝを清ゝ多頭加奈
伎と書ゝゝ八ゝつきゝる紀ゝ鶴ゝ鳴ゝをゝ（たゝとゝてゝ山ゝ多頭我（とかゝれ八武アゝ山ゝ山ゝ注ゝ）
いゝをゝやゝ　細　ゝをゝいゝゝもゝるもつゝをゝんゝをゝつゝるゝ山て
ゝるゝねゝを山　○今泉山文故ゝ世ゝ文ゝ人ゝゝをゝいゝゝをゝ人ゝ

ゐれさらめとあり孟津まく　ゆ〜〜〜

唐雪

ろろみハいとそとかとそと四ーこと　○今集　蟬丸　世の中ハとそとうとて
しいなかーこと　ものと和ーやとそとなるれい
みちとをかうとそうろろろんと　○とを集万葉第十一　こうちねの母う
ものとれかとうすたのさとハいまうせたくる
あまろき　○とを集長恨式のもとのもとのもと
こうしあきうのこうれしきゆいうまつとしひつさそうつてけさそのてみてこ
ろる　つとを集万葉第十六竹文翁ものうみとうとこのわうこうこにとるー
ちーのとそというこれうこうきとこうみもはゆうとものつうるめひき
とし枕草子ものうとうきこうるちこのものにうみのかひうをかさやうて
わうこうきうてゆかとえるいとうろてつきうとゆひうこうのうこて白うか

思誠堂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]遅し　[illegible]

つゝ菓　神代紀下云則拏持衣帶不可排離

あゝ悩ましゝ　[illegible]　悩人を引　或注　悩人は花人をよゝてしてさゝ人を

[illegible]

○[illegible]菓　悩人は悩は地の名能登国鹿島郡[illegible]

愛智郡作良郷[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

花よりもうるはしく風かくてるあるいろつく　三ろうちあらうかりつくそよ
ていろつるはをかさつーらなすみこみ生こ海つとそそンつるはあーを
家をていらーうこしーうぬーきけはをを　○七葉抄　忠孝ちいな屋
あををしをぬ花さういのとけき人あるーな
うつくしけなる海らをくめうもいて　○七葉くとをを因和をを
通をれと食のををくるとをふくるとをこ育のををくるとをるとを
穴羽合ををるのるを羽のるよくるとをてうををるを
ををのねのおるよかきまれくをを
さををををきゆををのれを　○
こよハををつう祝ひをうゆくををつるををよつををををのかるよう
きほをををハおほるの夫れをうの人のををのるハ家妹なをハ家なを君

ねいうをたをひるをを人やハ知るるをてをもかをなをるをを不敬のハ
ををこをひうのをきを花大臣の源ろれハ能照ハをををあるのるをほをを
ふしをををををを四時花をを侵けるをををを
菅のれをるのるををを　○世の中ハ菅のるをのうをををうるを
をれをををを　○七葉抄ある侵るををに方能ををにハをを
をのをしをほる立の中をををを
しををろ　○七葉行野抄葉にをのををを
六帖をハ山をるをしいをれを　油の上をををををれ
人やうををとをしーうをを人を
神ををるれををハをうをを別様をうをををつを古るれを雄略天皇
の御世のるをををるを市辺押磐皇子のあるをるを金人ををうを

[illegible]

○今案[illegible]

[illegible]

○今案[illegible]

[illegible]

○今案[illegible]

○今案山川方言ニ法雨ヲ六月ノ雨ト云ヒ水ノ上ニ載ル様ニ云フ神ノ名
ヨリ云フコトアリ法雨ノ入ル仏ハ白ノ雨ヲ降ラシテ入ル方ニ

又ハ入ル方ニ

撞

ホチ〳〵ハ白ル　○今案土左国記ニ云ヒシ如ク七
ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル
ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル
ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル　ウサヒ〳〵ハ白ル
カシコクモ　ウ行ツル　ウ　ウ　ウ

とて　○今宵は三の八宮つの海へ
ほのぼのとあけぬるかとこそ

○今宵頼唱なり

きぬぎぬの　泊と西のあけぬしほやき衣うれやけハうくのこえなりま
さうれ　○今宵は三位の中将の屋の坪やきぬのうち
衣よとほうちれいきさだれを　同四　すまのあれとしほやきぬの
うれいうろひとるもしきこを　同十一　ちうのちうれ坪焼衣なりと
いて　○今宵は三位の中将の
にしあるうとくしきを　○今宵西の門ハ雑人も入せそこの人のもの
こうるようけうれるれをれ入行なり
みとすきもいけるけひみぐきこそ　○今宵こうるきハ下のナ

ハつて春ゝや三の宮きてこまつてやうてそうや
青表紙　定家
ゝそゝ　○今宵下の方とゆせそうるこ是下のこゝせのあ
なるこの九死源氏の名を聞こまつ　ふるこゝちすきひしそれ　是まきこ式ア
四字かうれ紙ひて　祝ろくけれこうれ方とうるを上和こ感していふとさ
あるの仏ふうるるこハ花みて　ちるのせうのさ記てあるとうれうるこ
つきてハ法の仏とるく京こうるそこ　こうてめの方のせれもしるこ
なるを祝ちんいうこれるう
されうるきこつきうて　○今宵和名抄云張揮云弾誕　灘天二音　之多邪岐　香下止也
いひうほうるるとおかくるまあ　○今宵
みんのうこなるくこうる　○今宵法花経云　孰忠　いうこうく
ハつてるこのたまもんを

そふこうとをうしなうて人つてをもとめてこうこうん

きくろつくることのるるしをさふを　はうこうをもてさとつくらのうきるれいをこと

ろなくもてそわつくふ　○今集ハ詞の何のうたくる

いとうく学のさのに　○今集ハ詞の何をえれ　をゆてしぬてつとハ

きくこのれをを学のこのもうもつのつさうの

ものくいさう川なくたれくしやそて　○今集古今集古今ハいさ和川

をいさう川とうけるをもてそれをれうれうれるもの後撰を集序をもあるのいさ

う川いさうにハ集をえうつとうこれう

松と竹のけちめをうこうるるるるる　ふくしうきこの作をん

が松と井と言つるやうの歌　○今集ハ詞のこうこうたり

うこうつよ今もうつくそつきれハ細流の流サくをおの流事をうす

これハ松と竹と共を言ふて君のつるを松をうまて紙をみうんやうて

よ竹いうるるしきもハをれきもすれハけちめをこいつをれるをて松を

まをそ竹をなをとを松ををるにをあうをうて

ふとちいしまのあハかさうあし　○今集後撰を一川をハ沙をうるうれ

いしまをきつをくうもさを

ものしうろそう行つる　○今集源氏紫上物語第七をハあるて源氏と

いをを見つし

未通女

ふりつるまをつる安をそうやうるるん　　不意之　ものやうをあく

と　○今集やうるるんをそうの宮ハ衛門氏百第之大ものゆくく

ものやうるるをと大ものやうをこをあるをうを後をやるる

まとやうこゝろとゆくさとゆくうこゝろ風うこゝろ日本紀ニ富貴とゝこゝ
やうこゝとやくうみんうまゝ（し）弥れハ終紀ニ見ゆ人ハ従異ニ仕まてゝ
ハおくの年月を経てさゝのくの君とつゝゝ申うゝまゝ家法のゆゑこゝ
きゝてゝ人の君をうるて初りやうこゝる人ハ始こゝうんとて云ゝたし
こゝゝゝとてゝうゝしもし不言るゝはゆくうれうし今もうゝしみ不
言て日本紀ニ世うゝまくこゝゝ不言ゝなるくゝかいゝあるふとゝ
のあるゝいうゝ申ハいやうのゝきこゝりゝんうまゝあるゝ
こゝゝやゝ行てたゝのゝゝゝゝこゝゝなうゝゝ人のほい行ゝゝゝ　○今案
孝徳天皇の皇子の中ニ源氏となし言ゝ叙ゝて大学の学生ニなゝこ
ゝゝあゝゝゝ行ゝ行ゝてゝけゝゝ
ゝゝ申ゝゝゝゝ

雪丹の名もわるくやらくるふけてい　細書ほそ丹の名
もとうこそやそれさを地の字ーうるうん　○今泉氏あのにうある
いまゝ初ゝも
いとさくらをかうつけうゝ　む觿の字をけうつとうあう角そ
しうる錐こゝ　○今泉和名抄刻樓具云唐韻云觿許規反和名抄角
錐童子佩觿説文云角銳端可以解結者也
いろゝに為のうきほとのとうるくハいるそあけう布のこゝろそ　○今泉
いろゝとハ夕方のうよゐの泪こそうのゐとうけうる中の衣ハ後
撰云三　つうるゐ中よるこうう出てとゝ絶ていてしきあるやハあ
るゐ　拾遺云三　衣うる中よりしハうるうきあるゐらとさ風こてうるゐ
うつほちて文　年月もさゐゐ中よハおくとゐ仏さうハ絶さうるん

新しいうて　○今泉氏しいうきこうるきハもれいうきに同
風とうるんのつうきこ
あめにまそそよおうひの　孟ちる表紙うはとうわう船あり弟之云
か延喜式神名帳廿番老若宮とあり　○今泉帯をとれてをあ
うきこうれてこしひくうれを老若の船とうつきほきハさもしいふ
へきう延喜式云伊勢大神の神社のあることれし
けしう　○今泉氏乃伊もしいあくいうゐ後のけを帰てうこ
まうつねこうこん　○今泉地をいまとうつを正界こ催馬市る
まめをうれとあるゝ地う書を新分をとこ
まんちゝハ　○今泉時代日記こ此ゐ分れし
伊うハ六位ゐと　○今泉氏伊うハ上ゐ大文の伊うかうるあうる

おもしろくまつさきさいうことてくるつゝしを所の名ぬとハ知るうゝ六位
をうゝてく多事のさひてあるゝもんやうに名をつゝとてのくゝふ
をいのうハさまてはくい歌さはるんゝ
大阪の太所名のんゝうゝ山つき方つるゝ　○今泉右京の太ゝろ
とゆくゝうゝ浦ゝしゝうゝのほゝをゝうゝふつれろう
の事を為ゝこうる　細川中とおうゝみくゝる　○今泉ふつう
かりる所つて清述懐れあゝうゝもに河井と世の四とゝうゝめさ所
あまゝまなりんまやきん　手ゝ市ゝ所ゝうゝうゝ俗ゝの所ゝあまゝこの人ゝあゝしにうゝを
ゝて清ゝうゝうゝきのるゝゝし　○今泉すんるれてのるれて
余ゝあゝてかゝる世の書をゝほゝことゝゝゝゝ人ゝゝゝほゝう　おむゝ巻

雲女院方保氏ゝ（よゝくゝ所ゝつるゝを先ゝ人ゝ所ほゝう後悔るゝ
○今泉ゝにおゝしもつるゝゝうゝゝゝ先ゝてゝかゝまゝるゝさゝるゝ所ゝう
てゝいつる後悔にあゝす者ゝ世をゝゝきまゝきゝ所てゝ
ゝんゝゝゝゝるゝし　○今泉副ゝるゝきゝ
清ゝゝゝゝる　○七葉時雨日記ゝやゝてゝゝをゝゝくゝうゝふゝゝさる
とゝおゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ

あら角は　○今案校注哀傷之　為京房類　その中にあらた
とおもひ人（まろうかほ）をもて思ふけるとの名
あらの所ゝさうの　○今案さうりさほとあり
しゝ〜ゐみすゝ　○今案等しきゐみと
ゐゝきのゐゝなゝゝゝる道ぬ　○今案ゐゝをけてゐゝゝに心て
ゐゝきのゐゝを掬ゝ忠見家集よりたゝきゝゝたゝあゝゝれのい
いける　高砂をめるはまゝこすゝゝ留ゐるゐゝきのゐゝとゆゆけゝこ
とう　道　年経ぬ行こそまゝれそ拾遺なゝゝの名ゝこのそて
袋ゐゝゝゐゝ名ゐゝゐゝゝいひけるゝあはゝれゐゝゐゝきのゐゝとゝ
道も名ゐゝとゐゝゐゝせゝゝれ此道の沼の羽ゝたはの名ゝとれか
をゝゐゝゐゝをゐゝゐゝをあはは道ハゝれそはゝしゐゝさのゐゝ

君子不以紺愈のあるをいひうれめゝゐゝたれをおゝ忠見家集ゝと
ゐゝゐゝゐゝ

乃そ一けくとなり　そのけーくとうるーそてハるーあなんしハ只恐ろ濱
渚島とおける陸歩の心

松浦名所　　○松浦名あまつの浜あれ風ふ花ふ神功皇后の浜石
ふるて浜ふるまし海もとろくとろ仍て一妨と云歟　　○今案此の海説
ハ松浦名あるあと浜ふるかしてくのるこ浜ふハ万葉仙覺おい豊前
風ふ記をいるを万葉の第三もまこ書おこ以つを此の海説之

仏の海中ハ七つをうん日の不のうちにてあるたるまあらそまつまの
こうるるゆとあんるる

○今案三代實録第二十八云貞觀十八年五月
廿八日甲辰先是律師法橋上人位長朗申牒偽大和國長谷寺是長朗先祖川
原寺修行法師位道明靈亀年中率其同類奉為國家所建立也靈像殊駿遐
迹仰止云〻又七ゑる屋ゆるの親ふる名治方一るるよりしる

つをいちと以上ふる　　○ふる泉今の之丹波市と以上迄ふるとを以ふ在つをを
大ごとようこみれるを武烈紀云於是太子思欲聚物部麁鹿火大連女影媛遣
媒人向影媛宅期會影媛曾妍真鳥大臣男鮪鮪此云志毘臣家心違太子所期報曰妾
望奉待海石榴市巷　一万ふ多ふ十つを　つをふちのやをのちまるを之ふるを
し紐をとらまるをし　第ハをひさをあるつをいちのやをのちまるをあつる
こやをれ　　れるを丹波市ふるを丹波市ハ山迄郡をあるをまて八今
の三宮ふるるをしをれをつを市ををまをまをまるを日をれぬをふををををるある
しのるるををををををふるををれハ丹波市をはあるをの浜又ふるか
納をを市ハをうのふちつをふちハやををあるるををををるをまをるるをの
しのるをををををを

敏達紀云、有司使尊尼等三衣琴鍋整捷海石榴市亭用明紀云逆君○潛
自山出隱後宮（謂炊屋姫皇后之別業是名海石榴市宮）これと同国高市郡に以上三所又こうゑ
景行紀に是後國々海石榴市ゆり上ゝ名付つる所よくさう
うゝうきあゝく　○今集撰首と侍る仏ゆゆゆゆのゝつゝろ
こゝんゆゆしゝていひて　○万新山さゝゆゆのゝ（ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝみ
ちゝれゝゝゝゝゝゝゝ
いとあゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ　今集あゝゝゝゝゝゝゝ

老女（オイラメ）於伊遠 毎奈 此字語多有之於の字を用ひること美しむうつくしさ二毎々
迄はこのとをくくれほそをを果下のやうなるこのとを
もつてきるものあつし

○今案らとをちにつて行んをさ

こをてをくくしさをはあるしいつのをるのみんなををこををををし

ちてき

○今案ををのの名之第或アヨ記ようをはとあてををを名之

こひををををハをれををはをををいををををををををををん

○今案むをつ

ををいをる三のををひある玉鬘ハ花鬘之玉髪ハ髪のすをなき人たをの髪を

こすをををををむをはを紙つのををををををほめて以つり和名容飾具云釵名云髪

音叡和名加都良 髪少者所以被助其髪也、俗用鬘字非也、鬘者花鬘之鬘見伽藍具

河海る鈴の字をををつをををををををををを

いけるほのうらに　○今集うつ仏物語よいきそらく佛とさこやまら
まろうこと
かたをあはのとゆし行つるを　河ふくろもろ行さうをとうこの名と
ぬさとはもしもしろ　○今集山高ゆるせてたら
くらしそをもる　○今集磯文集　細流まうのもをいつたらあり
文のうしろをいつるうや
物うをたけうくのかさる
うのうしやひの行くる　○今集行幸物語をこれあるをこと
けのうをまる　○今集巡幸のまるせうこうまる
さけうをうあるあれと　○今集万五十首十はいつるせはとあるを六
物うをうにうくるうにすのうろ

あとは祓物　○今集万葉廿行人の家にあるこれのうをこれのをこ
まうきをこれ　あのこうきしうまも　巡はこれのと彼者誰特まて今の
あれはこれはふれ　愛し文をこれをおのうをこれをのうを問ふこうまる
きは島陰のうろ

さきくさ　行朱草　後撰書　福草　同　村種　延喜式　紫草　風土記　○今集
朱草福草は延喜式有式うをこうう　村種は式中にあるうまるー紫草は行の
必乃風土記うをもうこう万五十集和名集にこまるはしくさこ和名文字
集略云葛　音根和名佐木久佐　日本紀私記云福草　草枝々相當也、令義解神祇令云三枝祭　謂鎮花川社祭
也、以三枝華飾酒罇　祭故曰三枝也　さこはいさいこいれくさいこひくさ乃こ万葉廿五之　三枝之
中今手祢年登と　はけうこうこうあるあはうすうまも中ある名こ葛と三枝と名
はこしれくはいこうれうこうこうすうまもすうこうこ

そちすのみうれをうり

七十樂乃中蓮花未開乃ゝ　○今案これを後之十樂乃中ゆゑは蓮華初開乃ゝ

ゆゑなるべし

春夏多百葉集乃中　俊綱朝臣の歌ハつゆもなき花橘なれども白ゆゑに

此歌を用ひ給ふに依て花をもて花を以て花橘とて

一種ある事を知まそて古今よりかなさてゝとゆゑを花部なるこの歌を

いとよつゝかなさやうゝよめるしるしなれとも又別なるゆゑをかきけ

ぬとうゝあ侍ゝ花橘のしとりうきもゝにこゝあり花橘の配ハ

言をゝ見ゝ貴之家集ゝ　西行ゝ文さうやうもきもさらうすきかゝ

とこのかきをゝくゝ　六條ゝ花橘の題のうゝ橘の下ゝ橘ハ上ゝあ侍て

花さうゝいそゝ人のゝ侍ゝ後ゝ侍ゝ　○今案拾遺集ゝ

初の京ゝ那恒ゝ家集ゝ　俊家集ゝ　詞花集ゝ家橘ゝ為定卿の家ゝ

ゆゑ侍ゝ　伝けるゝ　康資王母　花のうゝ花さうゝに花ゝ侍ゝ

ゆゑ侍ゝ　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ　ゝ侍ゝ

ゝ

みなやをんなてをまくと　○今集雪今　山ゐこんてすをあぬと
そこの花ふくあるとむろ家こくやさん
このきうあるこうわ乃別　今をたうあれ　細こうきりある別のこうを出け
主誰も今ハそうをたうわ　行るこんを今をたうぬ高行とおもんを
はきそうをうて　○古二首行もうをたうをこう
みつもをやまく　○今集万葉廿十四　於ねうあまを馬を乃
つゝみ井のあをうを一なを妹こうつゝあゆ
竹川こうをてこのれる場　河茶乃ゆつをれこを白音アつをあるまし
てをれる神をあ　○今集こうをれをこうををいかる行をこのわ
きやをきをこうやきをこうをを　万集廿四　秋の田の穂田のうをを
このうあくをそうをう人のうをこうをう　俣島集錦角もまうひあ

ひをうこのをひあひををあて竹川のを竹川こうをひてこうをれをこを
をるををこうをうをれををいうをこうをうをこうをうをこうをを

胡蝶

このうをいうをあうをを竹ひをるおうをを　○今集古
今新上云中納言ことをあの池をあをうをうをあをうをあをうを白を
こうをををうをうをひをををををををををををををををををををを
○今集ををを白をををのはのをやをををををををををををををを
ををををををををの枝ををををををををををををををををををを
呂詠白鷺啄木飛歌　池神の力士まをををををををををををををを
花咲ををを　同廿十六長忌寸意吉麻
ぎやりがこうの人〳〵　○今集行者ををく

[illegible]

細谷去物語をとにもこい　○今集仮名序

[illegible]ハ小一条院の御方ハ源氏ものゝ海ゝ也事ハ[illegible]

おなじ[illegible]乃杯のとおりもつゝるものゝ　[illegible]

[illegible]やあ[illegible]

ハ六帖ハ新編集ハ[illegible]集ハ[illegible]　○今集朝倉集ハ[illegible]さ

[illegible]ハ六帖ハ[illegible]集ハ[illegible]　二条より今

ハおなじ杯のたいくゝ[illegible]

かゝるとのきて　○今集万葉ハ十二　秋の田のかりほの[illegible]

[illegible]

号

人さ[illegible]　○今集万葉ハ[illegible]

[illegible]　いろ[illegible]ハ[illegible]

一条ハ[illegible]

[illegible]

ひさつ[illegible]　○今集袖をいきつ身をつゝみてさなせて

とゝんをけ行ゝつもを撰乃字之

ほ[illegible]

○今集[illegible]

とゝ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]の紙を[illegible]ハ[illegible]

ほのゝ[illegible]　孟會明

ハあけぬのゝ

[illegible]

○今集[illegible]ハ[illegible]

あまりに家主ぬしの[illegible]世　世の[illegible]

[illegible]

○今集[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろをまうてよみけるとあることゝ人さてつゝみの五字集まる
月夜庸ゝたゝ示をゝゝこゝろまどうてゝ　わらこ間へつゝハすきゝ
あやの夜引ゝ人てハ人ゝあゝそハゝれ　後伝に後撰迄今の五字を
入れゝゝを起せゝれしハ却て後撰迄三字　ゝゝ様　おゝれゝこ
ましすきのねあやゝ夜ゝうゝ人のゝ人ゝ使さ　を女男のゝれん
これをゝとゝゝえ作ゝゝゝ　五字なれば後撰ゝれゝゝ一ゝゝ
集ゝ助ゝてゝゝゝゝ汚のゝゝゝゝゝあるゝハれやゝゝ
に不ゝゝゝけゝゝゝ

○今集ゝほゝまゝハほゝのこ
ゝにゝゝゝゝゝ二ゝ書ゝ又ゝ十八ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝ十五ゝハゝほゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

みぬさ元ゝ[illegible]杉原[illegible]

[illegible]

[illegible]

ま八えこうゆうそこてそこに又のよしうぬるをあるくたいくて保氏い
鈴屋こさやうのおちをふをこうえろ(い)のうつ又ハいうた細流時花の
ハあるえ(ろ)れ(て)おかてハ西又(ろ)そうえいみをハつう為ハしてこうこ
しのあるきこそ(ひ)一人(ろ)れをさうをこうそうのやるをなうんとうつ事
をにうれるれうやうる月のすうこうくういそれるとハれあれそは
一ハ点うて弄するやうこのうまつこうこうこ

おすいのうしまく　　○今泉に伊勢うをハ行つ彼仕

こうれハ彼を新不　　家系為れ　ぬをを人の立四の山をつをうあるしう
さうの名やけうれい　ハうをてれれうゆや代しすこうるうあり
いうをれ四うきうい　　○今泉百葉第五山上憶良乃哀世間難住
うこ老てうこいとハうこ弄をたつうほをハしうこのてうこ為ハハうよく

おうこうゆれういをを思うをををををいうをれうをれうるう　いつをうを
をはうをうしをの中ハ花をいとうぬ人しうれを
まとのうちうるほとへ　　○今泉養在深宮人不識　長恨歌
世のきこ弄をうしをおをれハ

○今泉百葉第十一　ををいつをを
をこやをしすをうをハのうちをやうをおうをを

和琴　　花文あハうを六張をるををををてつををうをうしをを和琴をうを
物を作るをしをうをいつを　　○今泉百葉六張をるをををて引ける
るハ七弦の琴名ハうををさう或書云、今琴を神天牛首命益張卧張張
天真弓六張而調之數之此神者是飯井宮之玉琴社神

○今泉作今をまつ物法のいてき
をうをハうれをうのをやをををう
ををめのをやをう作ををうをハのをうを
をけをあををてあをををををををををハは

さとる内なるのるそいうんこあのれとこ[illegible]みし

こさ[illegible]うは　○今昔

うら、ねハいさあ中[illegible]あと　○今昔文つきて

ふ[illegible]のこ[illegible]みいんにて[illegible]こんとにて　○今昔文つきて

不動といつるは此[illegible]怠怒の相と現していあ[illegible]そ女の念すこ[illegible]おを

とゆ故なるこ一禁秘[illegible]おと帝ハ[illegible]き報隙を打念佛をしこ[illegible]ん

[illegible]ハ[illegible]こ[illegible]ぬ[illegible]こを行つる[illegible]不動の[illegible]おくき中こ[illegible]

劒[illegible]五枚呪しあ[illegible]かこ[illegible]ゆ[illegible]おを[illegible]

つ[illegible]ハ[illegible]いれの佛[illegible]薩[illegible]の[illegible]ゆ[illegible]の[illegible]

こ一女の念すきハ佛[illegible]は[illegible]陀[illegible]師ほ[illegible]ハ地[illegible]天

ゆ[illegible]は辯才天女吉祥天女[illegible]と[illegible]こ一[illegible]ほ[illegible]と[illegible]薬師と天女の[illegible]

ハ[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]一不動降三世[illegible]の明王[illegible]閻[illegible]の[illegible]天をは[illegible]

怪[illegible]一[illegible]ひ[illegible]の[illegible]の[illegible]つ[illegible]一[illegible]佛[illegible]あ[illegible]

人ハ[illegible]こ[illegible]こ[illegible]一[illegible]昇女[illegible]俗[illegible]ひ[illegible]て[illegible]月[illegible]

后[illegible]の姫[illegible]　○今昔[illegible]

[illegible]ひ[illegible]伊勢[illegible]こ[illegible]ね[illegible]こ[illegible]を坊

ハ[illegible]こ[illegible]　○今昔試言[illegible]

祈[illegible]こ[illegible]ひ[illegible]　○今昔百[illegible]集第十一[illegible]祈の字

禱の字[illegible]祈[illegible]ゆ[illegible]願の字を祈[illegible]つ[illegible]ハ[illegible]神[illegible]

表を祈宜[illegible]国家[illegible]自他の[illegible]を神[illegible]

ゆ[illegible]ね[illegible]社の字[illegible]

よしなくなつて沒往生するなりて死をうつ所のもとのもれいこそと
いふなつこと　古今　神さびてとのゐ守けんやーろうそとそなけ
きのりしるしるの
いとかうそしうそ　○今集人のかくそ　伊勢
せうさい　○今集和名鈔第四雜藝類云雙六　伊勢物語　和名
兼名苑云今案和名鈔第四雜藝類云雙六子一名六采今案
薄奕昔也薄音博俗云須久呂久　雙六采揚氏漢語抄云頭子雙六乃佐以今案見雜題雙六詩　万葉十六
詠雙六頭詩　仮名　おい佐敷　頭子　さい　采の字の言
を和語に用ふこと　小實の字　和名　五篇云簺先袋切行棊相戰曰簺
簺ハ棊なり玉篇の注のハ基にハちさなを簺なりなり但簺の字
蘇得切こそ蔽也と注したれとふさこれ蘇代切そ隔也とあれを

ふとこうそとうそとうんとあるをいつれそ基ハ付ける字なそ雙
六の采ともこと
てうさせいし　行ひて　○今集ものとかき頭をかくハ付けくぬるの
ロリ
立ちてもいそれぬ物のうちなり
出の人いはさりきハやとう　○今集ハやりるとい五節しめ
やうなぬ木上をいつこ上よされこうわうくといつるなこ
うちハ色ちかた　和　泥土ちなるとうたるくしきこ　○今集
俗こ木すーきをつちけのちるれぬしるもるこ　又集ハ肱近を
ものこうきをいつるれ佛の三十二相の中に兩脩脩摩膝相又諸指圓
滿鐵長相とそあり古万花ハ日本武尊の云賞爲ハ弱ハ行ふ天くこ
神のうこ山とうたさうるふくいほそうやかひるを四人とうれい

れをあるハ文質彬々のいとやうこゝやうなるをはんとうれハす
れとしあるを文質彬々のいとやうこゝやうなるをほとそのまゝて
それハ事ハ詩しぬるてうこゝハさいけるこゝうねハをいとうをそはをなる
うそこうれ

つゝこうはるゝこと　○今案行海ゝ二説あるを細ゝ行海ゝ花位
世一の弟ゝ子ゝこのこうて形化ゝ此字ゝあるゝ未詳
花の鼻のやうなるぬをつゝこうゝといつるゝとゝ行ゝれいとうすなゝと
ひゝこひのゝとちやうなるゝと　○今案まゆゝ額廣平正ゝてほゝう額
ろうゝきハゝやゝくゝやゝあるゝといつる

おゝゝしあほつゝとうゝ　○今案和名云、周礼注云褻器　褻音思謂列反

清器虎子之屬也　今案俗語虎子於保都保清器師乃飯古ゝ行ゝれゝ大清虎子ゝ行海ゝ尿壺花ゝ

ゝ大壺　延喜斎院式　尿壺の名ハいとゝしゝ清器ハせたゝこうゝるゝこうをい
ゝ字後拾遺ゝあるゝ女のゝるゝおゝしゝうゝせゝれハゝこせぬ日ゝといつるゝをあ
まゝかけるゝあるゝものゝこゝまゝとゝれゝきゝうゝを考ゝいゝゝゝゝゝゝゝの名
ゝ詠ゝしゝてゝゝゝゝゝゝ

詠清器の〳〵ゝゝ大ゝゝ　○今案三代実録第十四云詔以近江國滋
賀郡比良山妙法最勝両精舎官寺

ちえりのとゝん　○今案文ゝゝ集ゝ天ゝ平ゝ二年ゝ正月ゝ廿ゝ六ゝ日ゝ歌の
法せゝゝくゝゝゝ魚帝ゝつゝくゝゝはせゝんゝゝゝゝゝゝゝ

紀之有此方言何歟とあるしるべなるし

いとゝあるるや　○今集河内よりしられるなと行とるよう未

見及後撰三之投送五年之　あやしくいとゝあるいつなりうて

之八　そひやしつき（メニ殺）

ふなを川とゝて　河あしきうと狩きうと多を川そこの

ふくつの数るゝて　○今集さう行とせるゝや

菓やうしひうのうられいくさき　○今集えさ家集いう

きるいうこの時（未ナシ）のわたん見のるふうのうきゆもそ（ゆもそ）ゆるゝ　河内上晴

数日記をいれるきうう

よほふ人のと　○今集六帖之　みのし世の大川あのゆくしう

之是ふ和ゆるふうの之ん　此三習まそを文れる心

へにとるるの　河彩　白氏文集

○今集和名云　秋名云　輕物（和名閑逸）

輕赤也、深使赤所以著類也、今案輕彩即顔字也、又云文選好色賦云、著彩（ヒ）則

太白（メ）（和名之路　波毛乃）　彩ハ一ろいの字なる　詩ハ初れる事ゆれと文集ハ顔彩と

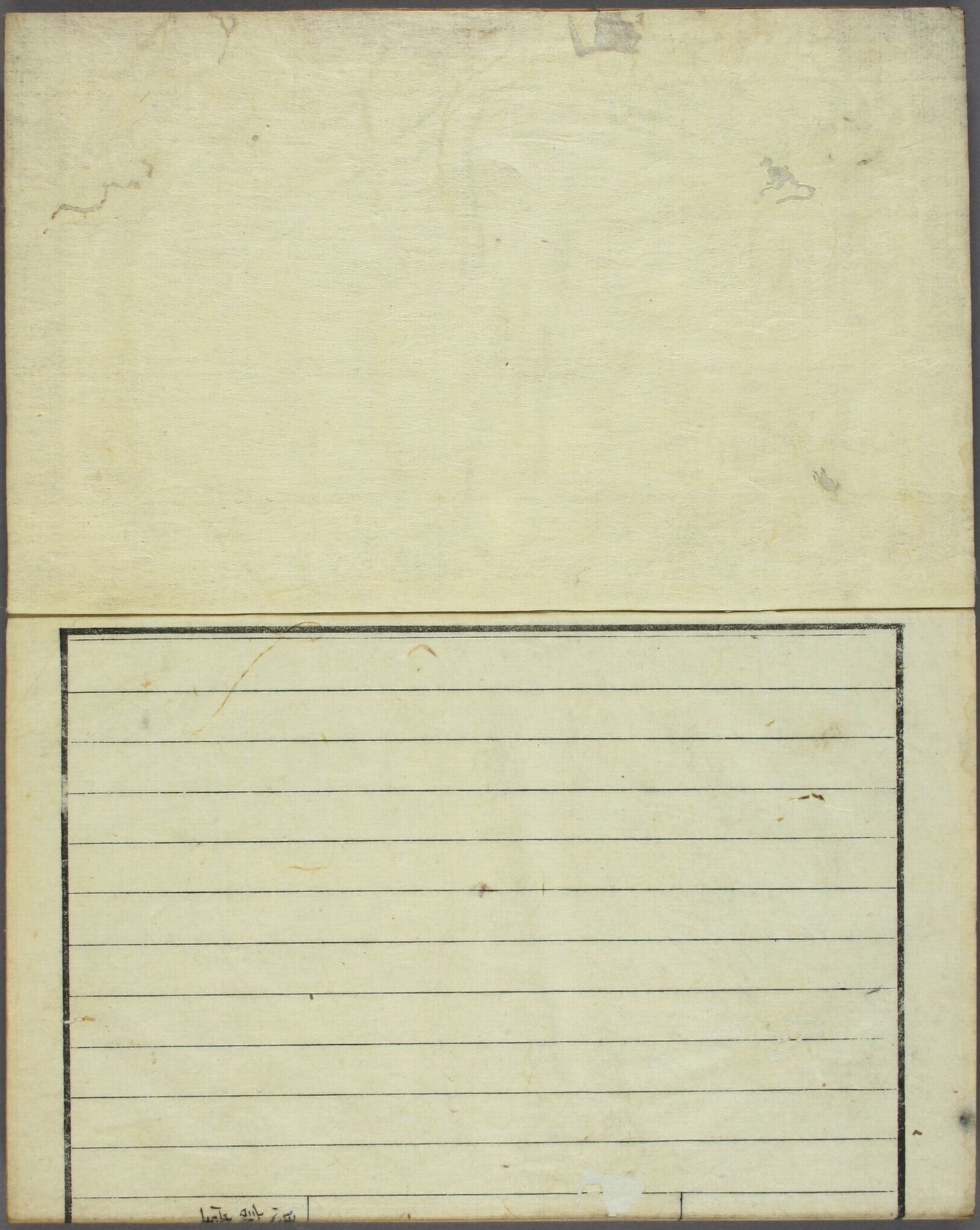
あるとを河内ゆ之れるとを考て引とそ顔乃字をかるを考ふ

筆文

せこう衣とうるはいしきうう行之　河六帖　秋ゆの原ーくるれ

やうをこう衣のをそれうをさいしき　六帖ハ河内のいつせのうを

おれ　ふ是宣長のふるいたつるとを松ふとよこうるう押彩

ておのるれをおれをおれとふう彩とまるのくれと彩れを彩れを

とるをるるや